詩の誕生

対話

大岡　信
谷川俊太郎

読売選書

詩の誕生

対話
大岡　信
谷川俊太郎

読売選書

読売選書

対話　詩の誕生

昭和五十年十月十日　第一刷

著　者　大岡信
谷川俊太郎

編集人　松田延夫

発行人　二宮信親

発行所　読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町七七　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　ナショナル製本

定価　九五〇円　1392-301380-8715

©, *Makoto Ōoka & Shuntarō Tanikawa*, 1975

もくじ

I ――――詩の誕生　大岡信・谷川俊太郎――――7
詩が死んでいく瞬間　11
詩の社会的な生き死に　14
言語以前の〈詩〉　20
詩的原体験――谷川俊太郎の〈朝〉　25
詩的原体験――大岡信の〈夜〉　28
詩意識――世界の奥行の深まり　31
詩における言葉と現実　42
和歌――和する歌　51
言語化された詩の出発　54
詩人の発生――普通人以上と以下と　58
現代世界の詩人の位置について　65

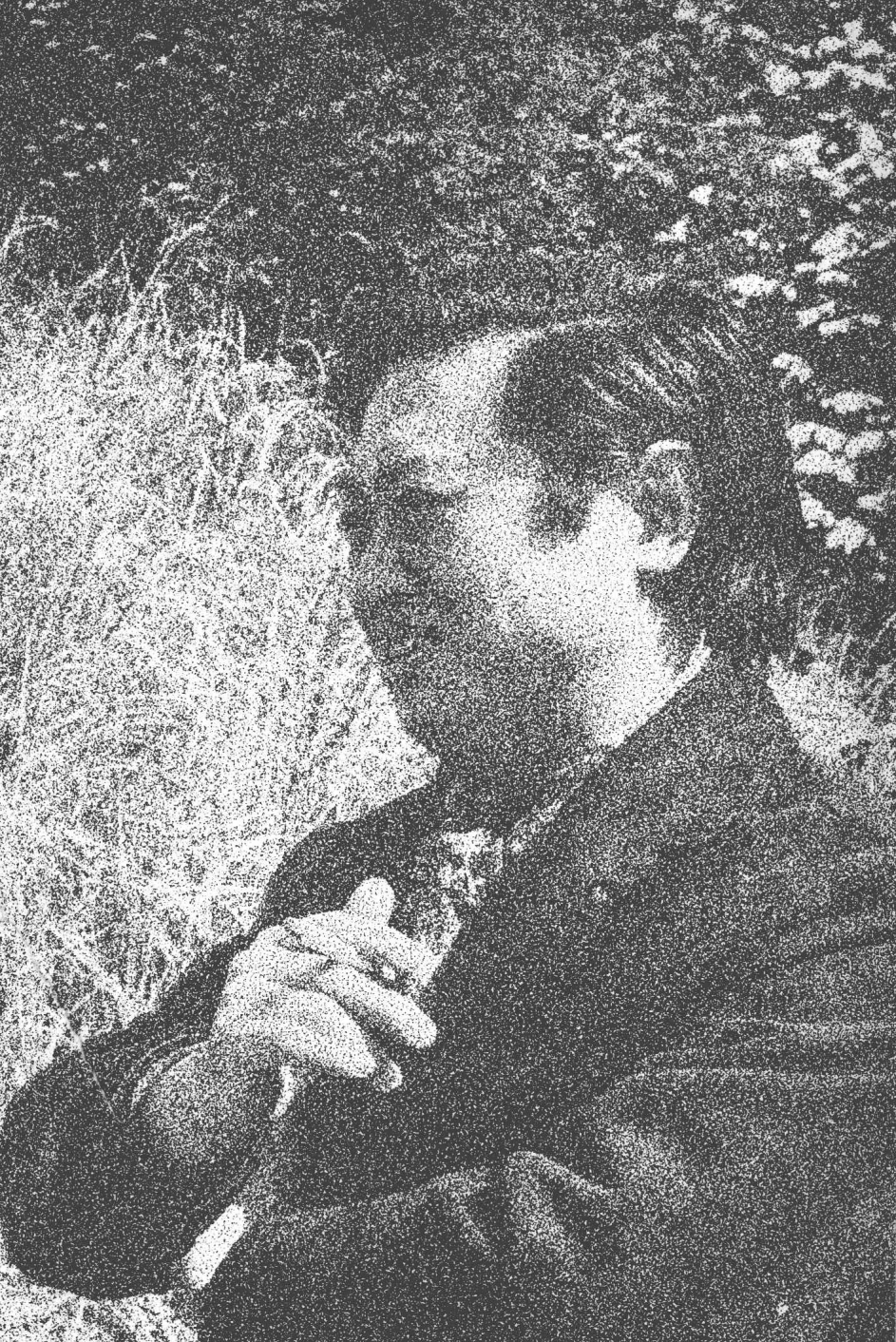
日本語の世界の豊かさ　71
散文脈を根にして——日本語の散文性評価　75
散文脈を対立物として——日本語の多様性発掘　80

Ⅱ——詩の誕生　大岡信・谷川俊太郎——85

言葉に自分がひっかけられてくる　89
言葉の富をアノニムに自分のものにする　95
さくらより桃にしたしき小家かな　105
マザー・グースの唄　110
七五調的なものにやっぱり深く縛られている　114
「コップへの不可能な接近」(谷川)　121
「壜とコップのある」(大岡)　121
一つの「有」もなく一つの「非有」もなかった　134
妖精のように跳びまわっていたいのだよ　144

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

Ⅲ――――詩の誕生　大岡信・谷川俊太郎――――155
一人・相手・読者　160
古今集・歌合・連句　167
結社・同人雑誌・添削　173
言葉・現実認識・一対一　180
芭蕉・後白河院・スナイダー　186
日本的感受性・個性・想像力　192
連詩・同世代読者・戦後教育　202
挨拶・暗誦・現実感覚・言葉　212
あとがき――高田宏　223
菱丁・栃折久美子――速記・大川佳敏――口絵写真・高田宏



本書は、エッソ・スタンダード石油株式会社広報部刊行の「エナジー対話」第一号に基づいて編集しました。同社のご好意に感謝します。

――読売新聞社図書編集部

I

詩の誕生

大岡信・谷川俊太郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

谷川――ふつう「詩の誕生」と聞くと、古代とか原始のころを漠然と想像して、そこでの呪術とか叫び声とか、いまいわれている文学の一ジャンルとしての詩の前身みたいなものが生まれたときの、そんな話に感じるわけよね。もちろんそういうふうに「詩の誕生」を考えなきゃいけない一面は当然あるわけだし、折口信夫さんにしろ西郷信綱さんにしろ、そういう観点から考えていらっしゃるわけだけれども、実作者として「詩の誕生」を考えると、詩がそういうものであるかどうか、ちょっと疑問がある。僕の実感としては、いま現在この瞬間も詩というものは誕生しているものだ。大昔にももちろん誕生したし、その後もずっと日々誕生して日々消滅してきたものだ、という意識が非常に強いのね。

だから「詩の誕生」といっても、赤ん坊が誕生して育っていくというイメージではなく

て、たとえば瞬間的に誕生して瞬間的に死滅するようなある種の原子の一種の運動に似た感じがするわけよね。そういう感じ方でいうと、個々の詩作品――いまは印刷された一篇の詩という印象になっちゃうけれども、――そういう詩作品を対象化して考える面を含むと同時に、詩というものを人間がどのように受取るかという意味での詩、いわば詩意識をもっと問題にしていいのじゃないか。刻々の詩を感じる人間の瞬間の意識みたいなものも、詩作品を問題にすると同時に、話題にできるといいなという感じがするわけ。

そう考えると、たとえば僕なら僕という一人の人間の幼児時代にさかのぼって、自分の人生のどの時点で詩を感じる感受性が生まれてきたかというところにも「詩の誕生」があるわけだし、いま詩人として詩を書いている自分のなかで一篇の詩が生まれるときも「詩の誕生」だろうし、また、一つの民族のなかに詩がどういう時期に自覚されたかとか、呪術師とか巫女がいつ詩人として自立したかとか、それぞれ「詩の誕生」にかかわりがあり、これは重層的なテーマだっていう感じがするね。

大岡――詩てのは瞬間的に生まれて消えてしまうある種の原子のようなものだというのは、まったくそうだと思う。ただわれわれの詩に関するかぎりは、死ぬ瞬間てのはよくわ

からないんだよね。文字に定着されてしまうから、ほんとうは死んでるかもしれないのに仮死状態で生き残っているのかもしれない。詩が生まれる瞬間は僕も非常におもしろいけれども、詩が死ぬ瞬間もおもしろいね。

客観的に文字として定着されている詩がいつ死んだかは、これはわからない。しかし、ある人のなかである詩が生きはじめて、ある時間生きて、やがて知らない間にすっと消えて、死んでしまっていたということはあるね。その死んでいく瞬間の詩の姿をとらえられたら、とてもおもしろいという気がする。

谷川——うんうん、そうね。

詩が死んでいく瞬間

大岡——詩が生まれる瞬間は感じとしてわかるだろう。自分が詩を書きはじめた時期のことを考えても、なにか言葉がムズムズ生まれてくるというか、むしろどこかがひっかかってるような気がして、その言葉を紙に書きつけてみたら、それから一連の形をもった言葉

が生じてきたというようなことがある。個人のなかでの自覚的な詩の誕生としては、そういうのがわりあい普遍的な形としてあると思うんだけれども、詩の死滅については、それぞれの詩がどこかで死んでいるはずなのに、それがわからない。

詩てのは現実にいつまでも存在しているものじゃなくて、どこかに向って消滅していくものだと思う。消滅していくところに詩の本質があり、死んでいく瞬間がすなわち詩じゃないかということがある。あるものが生まれてくることはわりあい自然であって、むしろそれが消えていく瞬間をどうとらえるかが、実はその次の新たな「詩の誕生」につながるのじゃないかな。

活字になった詩は永久に残ってしまうみたいな迷信がわれわれにあるけれども、実はとっくの昔に生命を終えているのかもしれないということは考えたほうがいいのじゃないか。そう考えたとき、本なら本のなかに詩という形で印刷されてるものをもう一回生きさせる契機も、またそこから出てくるのじゃないか。これは死んでるから、おれはもう一回生きさせてやるぞ、ということが出てくると思う。

谷川――詩が死ぬ死に方だけれども、それが社会のなかでの死であるのか、それともその

詩を受取る個人のなかでの死であるのか、二つあるよね。個人のなかで詩が死ぬというのは、たとえば三年前にすごく感動した詩が、いま読んでみたらどこに感動したのかぜんぜんわからないということがあるでしょう。

大岡——あるある。すごくある。

谷川——僕もその経験が、詩にもあるし音楽にもあるのね。非常に感動した音楽にまったく感動しなくなっている。それを単純に、自分が大人になったから、あるいは自分がすれてきたから感動しなくなったんだみたいな言い方もあるけれども、それはちょっと信用できない。そういうものとぜんぜん違う何かがあって、詩が死に、音楽が死ぬ。個人的な経験から言ってそうだね。それがなぜなのか、とっても気になるんだけれどもね。

また、もっと微視的に見ると、ある一つの詩を読むにしろ聞くにしろ、その詩に感動したらその詩が受取り手のなかで生まれたと考えられるけれども、その感動は生理的にどうしても長続きはしないよね。電話がかかってきたとか何かほかの仕事しなきゃいけないとか、すぐ日常的なことにまぎれちゃう。そのときには、その詩は死んでいるとも言える。もちろんそういうふうにあまりにも微視的に見ると、詩は単に人間の生理にかかわるもの

だけになりかねないから、そういう考えは危いけれども、われわれは従来あんまりそういうふうに考えてこなかったでしょう。たとえば『万葉集』という詩集が千数百年をずっと生きつづけてきたというふうに、どうしても意識しがちだよね。僕はこのごろその考えにやや疑問があるわけ。詩てのはそんなふうに確固としたものであってはいけないのじゃないかな。」

詩の社会的な生き死に

大岡――たしかに個人のなかでの詩の生き死にと社会化された詩の生き死にとあると思うね。即物的な言い方をすると、一人の人間の脳髄から生まれた言葉が文字になった瞬間に詩が社会化されているんだと思う。もちろん、音声だけで詩がうたわれ、語られていた時代のことを考えれば、それこそ詩が最も幸福な形で社会化されていた時代だといえるかもしれないけれども、現在のわれわれの表現手段からいうと、文字にいったん書くということが基本的にあると思うね。文字になった瞬間にその詩が、少なくとも潜在的には社会化

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook